

バンテアイ・クデイ第60次発掘調査概報

—前柱殿東南小堂 C10（いわゆる上座仏教の「仏教テラス」） および小塔 C19での発掘調査—

上智大学総合グローバル学部

丸井雅子

上智大学アジア人材養成研究センター

ニム・ソテーヴン

大阪市教育委員会事務局

宮本康治

1. 調査に至る経緯と経過

(1) 調査経緯

上智大学によるバンテアイ・クデイ発掘調査は、同遺跡の歴史的展開の考古学的解明を目的として1991年に始まり、これまで前柱殿 C09一帯（1991-2001）、続いて東参道沿い小建物 D11一帯（2001-2017）で実施されてきた（図1、写真1、2）。とくに前柱殿 C09南側一帯では、調査を通じて前柱殿 C09の基礎地業が明らかにされたことに加え、建造時期が異なる複数の遺構を検出し、外回廊東南列柱殿 C03と各遺構との築造に関わる前後関係を検証することもできた（中尾2000；Sophia University Angkor International Mission2001）（図2）。

これら一連の調査の中で、前柱殿 C09南側に位置する東南小堂 C10西辺では、アンコール期から近現代に至るまでの利用を類推させる遺構や遺物を層位的に確認した¹⁾（上野1992；上野他

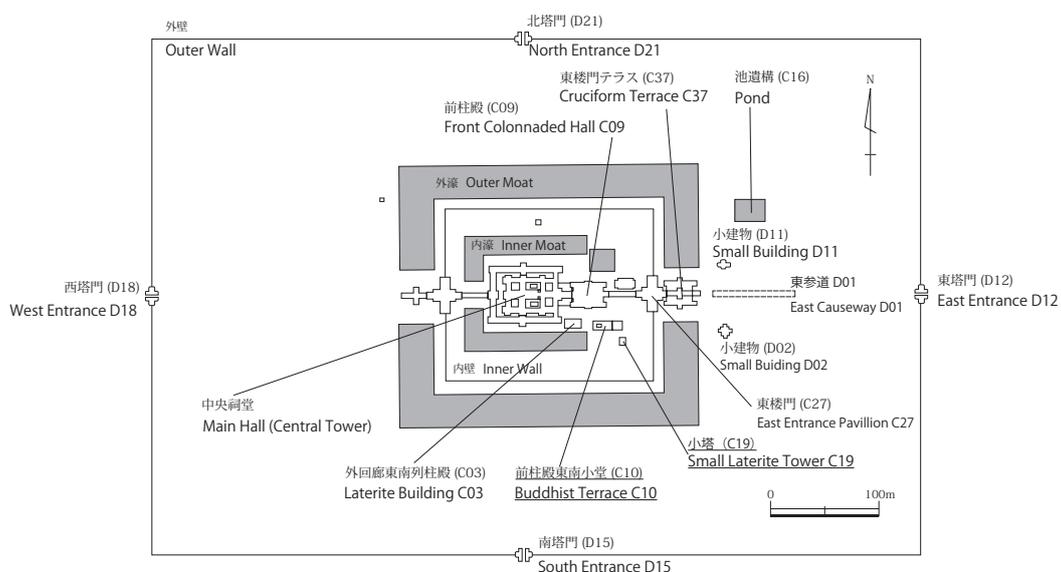


図1 バンテアイ・クデイの伽藍配置

1) 東南小堂 C10西辺の調査は、第19次調査（1996年8月）および第21次調査（1997年3月）の2回実施された。調査時の報告では、東南小堂 C10を「前柱殿東南小堂（建物96）」と記載しているが、その後上智大学調査



写真1 バンテアイ・クデイ東塔門



写真2 前柱殿 C09 (南から撮影)

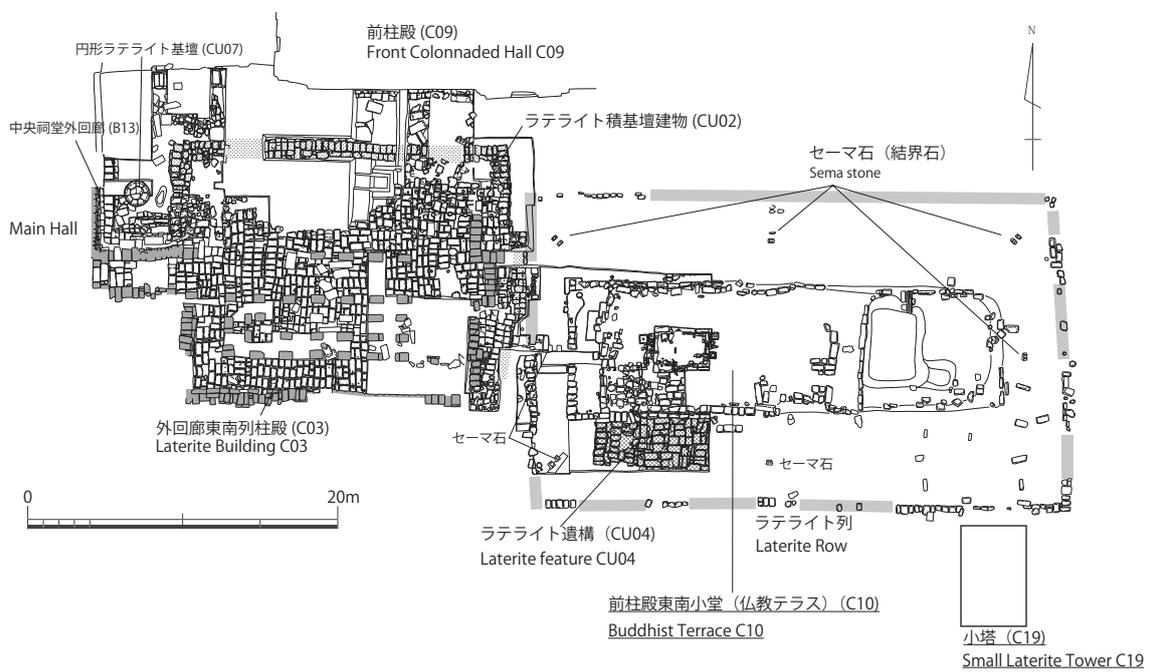


図2 前柱殿 C09南側一帯調査による検出遺構



写真3 現代の上座仏教の布薩堂 (アンコール・トム内)

1998；中尾他1998, 1999；NAKAO and others1998)。東南小堂 C10の遺構としての特徴は、いわゆる上座仏教の「仏教テラス」と先行研究（MARCHAL1918）で指摘される構築物に分類され、アンコール・トム都城内では現在の上座仏教信仰の布薩堂²⁾として機能している（写真3）。バンテアイ・クデイの仏教テラス、すなわち東南小堂 C10については、調査成果および先行研究を踏まえながら、バンテアイ・クデイの歴史的展開について考察が加えられてきた（宮本2003, 2010）。しかし東南小堂 C10の遺構全体像の解明、さらに大乘仏教以降のバンテアイ・クデイの歴史的変遷解明のためには、未調査個所である同遺構東辺における発掘を通じてより詳細な資料を得ることが必要と考えられた。

（2）調査目的

今回の第60次調査では、これまでの調査では未解明の C10東辺を中心にトレンチを設定し、同遺構の全容解明を目指す。また、C10南側に建つラテライトを主材とする小塔 C19と、C10との建築の前後関係も明らかにすることを目標の一つとして設定した（写真4～6）。

（3）調査個所

前柱殿東南小堂 C10（仏教テラス）東辺地区および小塔 C19北辺 約30㎡（図3）

（4）調査期間

2019年8月1日（木）－8月21日（水）（計21日間）

（5）調査参加者（所属、肩書はすべて調査時のもの）

丸井雅子	（上智大学総合グローバル学部）
Nhim Sotheavin	（上智大学アジア人材養成研究センター、上智大学アジア文化研究所）
宮本康治	（大阪市教育委員会事務局）
Tho Thon	（アプサラ国立機構）
Meas Rithyrathet	（アプサラ国立機構）
Phin Phakdey	（ブレア・ヴィヒア国立機構）
Choeun Vuthy	（上智大学アジア人材養成研究センター）
Ing Morokoth	（文化芸術省無形遺産局）
Phuy Meychean	（王立芸術大学考古学部4年）
Lok Panha	（同大 考古学部3年）

団によるバンテアイ・クデイ建物インベントリー作成作業を経て、東南小堂 C10という登録番号と呼称へ修正され現在に至る（上野；1997, 1998；河野1991a, b；上智大学アンコール遺跡国際調査団1997；藤木1991）。

- 2) 上座仏教寺院境内に必ずある3つの建物（布薩堂 vihera, 講堂 sala chan, 僧房 kot）のひとつが布薩堂。特別な儀礼的行為によって定められた浄域（sima）を持つ建物。浄域はカンボジア語でセイマー（seyma）と呼ばれる。上座仏教の出家生活に不可欠な空間であり、三蔵教のひとつである律蔵がその詳細を規定する（小林2013）。

なお、布薩堂はカタカナではしばしば「ヴィハーラ」や「ヴィヒア」等と記載されることがある。



写真4 前柱殿東南小堂 C10 (仏教テラス) (手前)、
前柱殿 C09 (右奥)、中央祠堂 (奥)



写真5 発掘区作業の様子 (奥が C19)



写真6 小塔 C19 (南西角から)

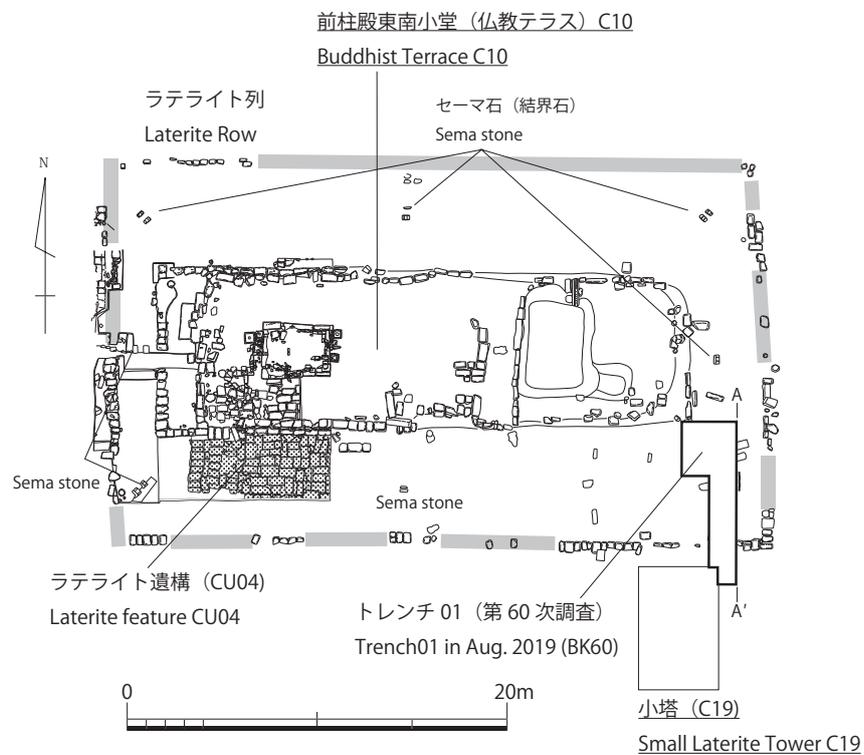


図3 第60次調査調査区

Thon Limsay (同大 考古学部 2 年)
Ngoun Chan Dariya (同大 考古学部 2 年)
原山 崇 (上智大学国際教養学部 4 年)

2. 調査成果

(1) 測量調査およびドローンによる撮影

発掘調査に先立ち、プレア・ヴィヒア機構専門家ピン・パクダイ氏の協力を得て、調査区の測量とドローンを用いた空中写真撮影が実施され、数値標高モデル (図 4) とオルソ画像 (図 5) が作成された。

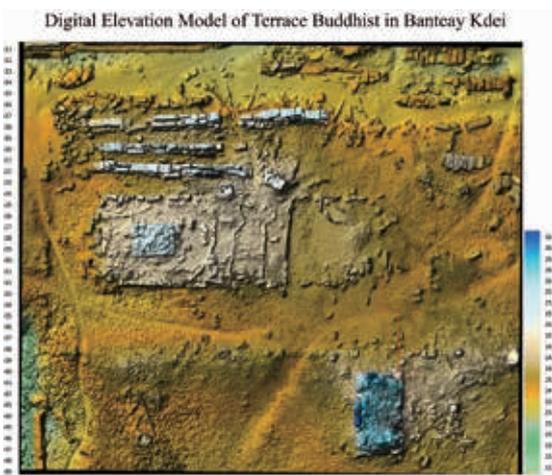


図 4 三次元座標値データ:数値標高モデル
(提供:ピン・パクダイ氏)

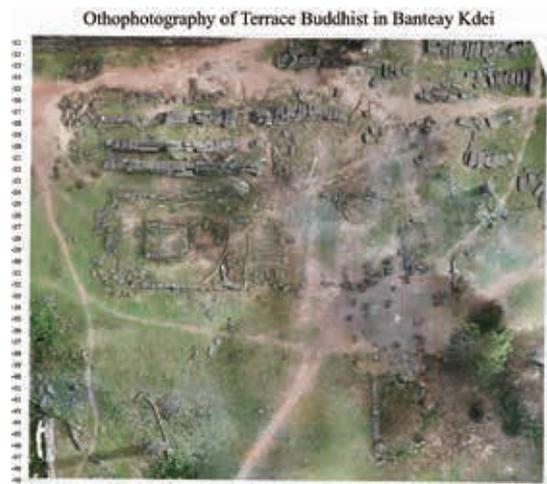


図 5 オルソ画像 (提供:ピン・パクダイ氏)

(2) 層序の概要

第60次調査は、C10とC19の間に調査区を設定し、調査時はそれぞれトレンチ01北 (T01-N)、トレンチ01南 (T01-S) とした。またトレンチ01北で部分的に深掘した個所はトレンチ01北サブトレンチ (T01-N-Sub) とした (図 3)。本報告では、まとめてトレンチ01として記述する。今回の調査区では東面 (南北軸) において以下の7層が確認できた。上層から概略を記す (図 6-1)。

第1層:褐色細粒砂で、現代の堆積である。(表土層)

第2層:にぶい褐色を呈す中粒砂で、土器や瓦の小片、砂岩小片、ラテライト粒等を僅かに含む。ラテライト列南側のC19近くでは、建物部材の一部と推定される砂岩塊を多く含むため、C19廃絶後の堆積土と考えられる。

第3層:にぶい褐色から褐灰色を呈す細粒砂で、砂岩小片、ラテライト粒等を少量含む。蔵骨器群の埋土。蔵骨器群の埋納坑である。

第4層:にぶい褐色を呈す細粒砂で、砂岩小片、ラテライト粒、瓦小片等を少量含む。ラテライト列南側のC19近くではラテライト粒と砂岩小片の量はその北側よりも多く、固く締まる。ラテライト列北側の第4層上端は、上層 (第3層) との明確な区分が難しく、

根による攪乱も見られる。蔵骨器群は、この第4層を掘り込んで埋められていた。

第5層：にぶい褐色から赤褐色を呈す中粒砂で、砂岩片、ラテライト粒、瓦片を多く含み固く締まる。この層の上にラテライト列が据え置かれたと考えられる。

第6層：褐色を呈すシルト質中粒砂で、砂岩片、ラテライト粒を非常に多く含み固く締まる。瓦片はごく少量含む。第7層を掘り込むような造作が観察される。C19基壇最下段直下にもこの第6層が観察されたことから、C19構築に際しての地業の可能性が示唆される。

第7層：にぶい橙色を呈すシルト質細粒砂で、砂岩塊、ラテライト粒を多く含む。ラテライト遺構（第19次調査で、C10南西部分でC10構築前の下層から検出されたラテライト遺構CU04の一部の可能性もある。詳細は、次の（3）検出遺構の概要〔ラテライト遺構〕にて説明。：上野、他1998）廃絶後の堆積であろう。

（3）検出遺構の概要と構築順序

下層のものより順に、検出された遺構の概要を記す（図6-2、写真7）。

〔ラテライト遺構〕

発掘区（トレンチ）内では、トレンチの東壁と西壁および南側でラテライト2段を敷き詰めた構築物を検出した。これをラテライト遺構と呼んでおく（写真8）。トレンチが狭小のため全形は不明であるが、東側、および西側に広がっている可能性がある。このラテライト遺構は、第19次調査において検出されたラテライト遺構（第19次調査報告作成時はラテライト敷石・構築物Aとした。その後、ラテライト遺構CU04と番付された。以降、本報告ではラテライト遺構CU04もしくはたんにCU04と称す）の一部ではないかとも類推されている。CU04は仏教テラスC10構築以前の遺構であることが確認され、部分的には3石もしくは4石以上を積み上げている。CU04の上には青銅製五鈎杵や砂岩製遺物（ナーガ上のブツダ坐像片、菩薩頭部等）を含む層が堆積している。これら遺物はCU04の構築時や廃絶の時期を示唆するものであろう（図7）。今回の調査で検出されたラテライト遺構の全容、および過去調査で検出された遺構との関係については、今後の調査で精査する必要がある。

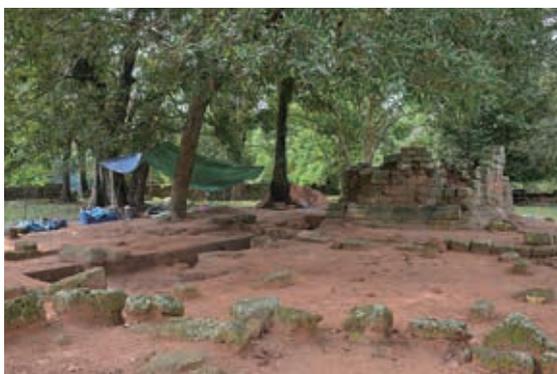
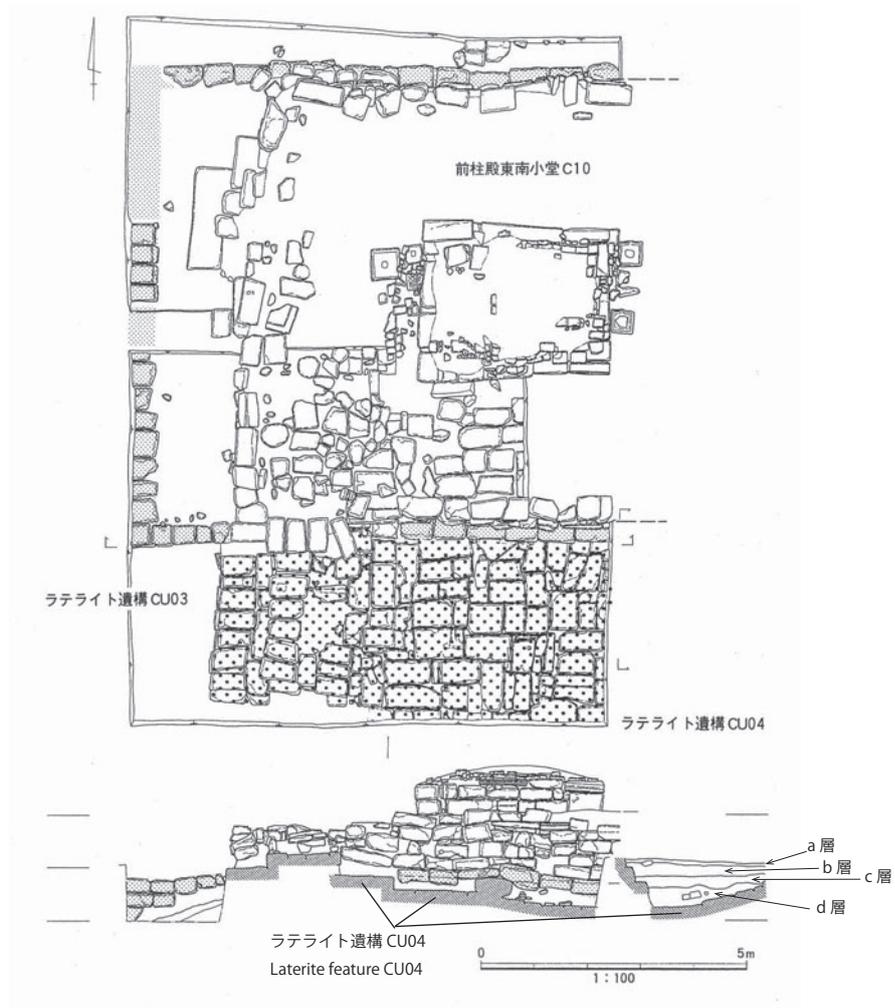


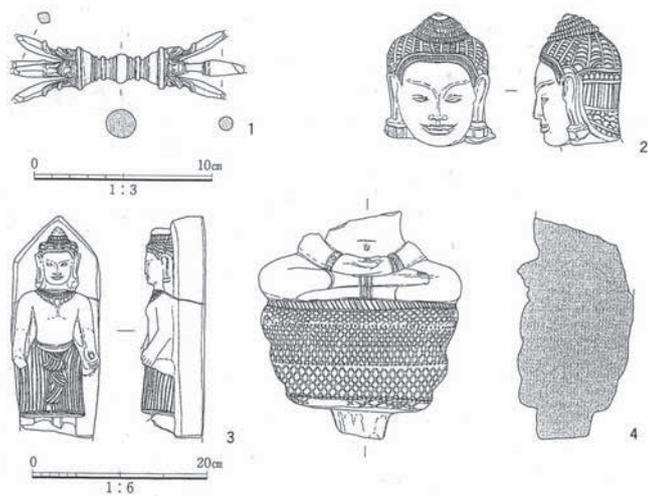
写真7 調査区完掘状況



写真8 下層から検出されたラテライト遺構
（トレンチ東壁）



7-1 前柱殿東南小堂 C10（仏教テラス）西・西南調査区出土遺構



7-2 出土遺物（d層出土）

図7 C10（仏教テラス）西南地区出土遺構と遺物（第19次調査）（宮本2003より転載）

[小塔 C19とラテライト列]

小塔 C19 (図 8、写真 6) は現状の平面は、南北約7.50m、東西約4.48m の長方形を呈す。最下段のラテライト 2 段の上に砂岩 1 材を段上に加工した材、さらにその上に緩やかな曲線でくり型が施された砂岩が 2 段、その上にラテライトが 3 段から 4 段続く。現在の最上段にはくり型が施された砂岩が残る部分もあるが、当初の構造は不明である。

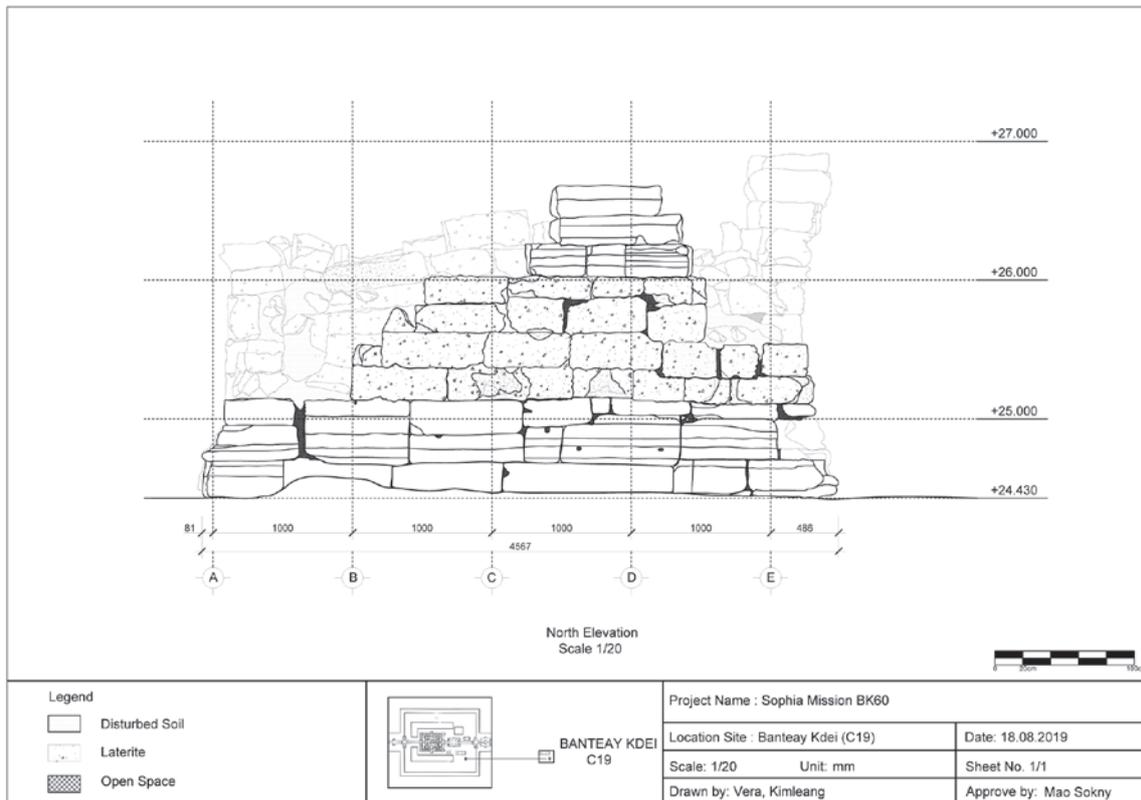
ラテライト列 (写真 9) は、その一部が調査前から地上に露出していた遺構で、C10とセーマ石 (結界石) を取り囲むような配列が確認されている (上野、他1998; 中尾、他1999; 宮本2003, 2010)。ラテライト列は南北約21.00m、東西約36.00m の長方形を呈す。ラテライトの大きさは均一ではないが、長さ約0.50-0.70m、幅0.40-0.50m、厚さ0.20-0.40m で、多くの個所では 1 - 2 段、小口積みとしている。ラテライト列を据えるための掘り込み地業等は観察されなかった。

C19およびラテライト列の構築過程を、残存する部材および周囲の堆積土の状況から判断すると、次のような前後関係が提示できる。C19構築のため、一帯の土 (第 7 層) を掘り込んで整地する。この地業はバンテアイ・クデイ前柱殿南側調査で確認されている「砂地業」と類似するが、ここでは整地のために砂岩片やラテライト粒を多く混ぜて固く締める (第 6 層)。地業の途中で C19の基壇となるラテライトをまず 1 段敷設し、さらに 2 段目のラテライトを積み周囲を整地する (第 5 層)。ラテライト 2 段の敷設が済むと、その上に砂岩を置く。また、C19上部構造の積み上げとほぼ同時並行でラテライト列が配置された可能性が高い。砂岩の加工と堆積土の観察に基づくならば、C19落成時の地表面は砂岩の段差あたりだった可能性が高い (図 6-1、写真 10)。その後、ある一定の時間を経て、C19から部材の砂岩が崩落し周囲に堆積土とともに埋もれていった (第 2 層)。

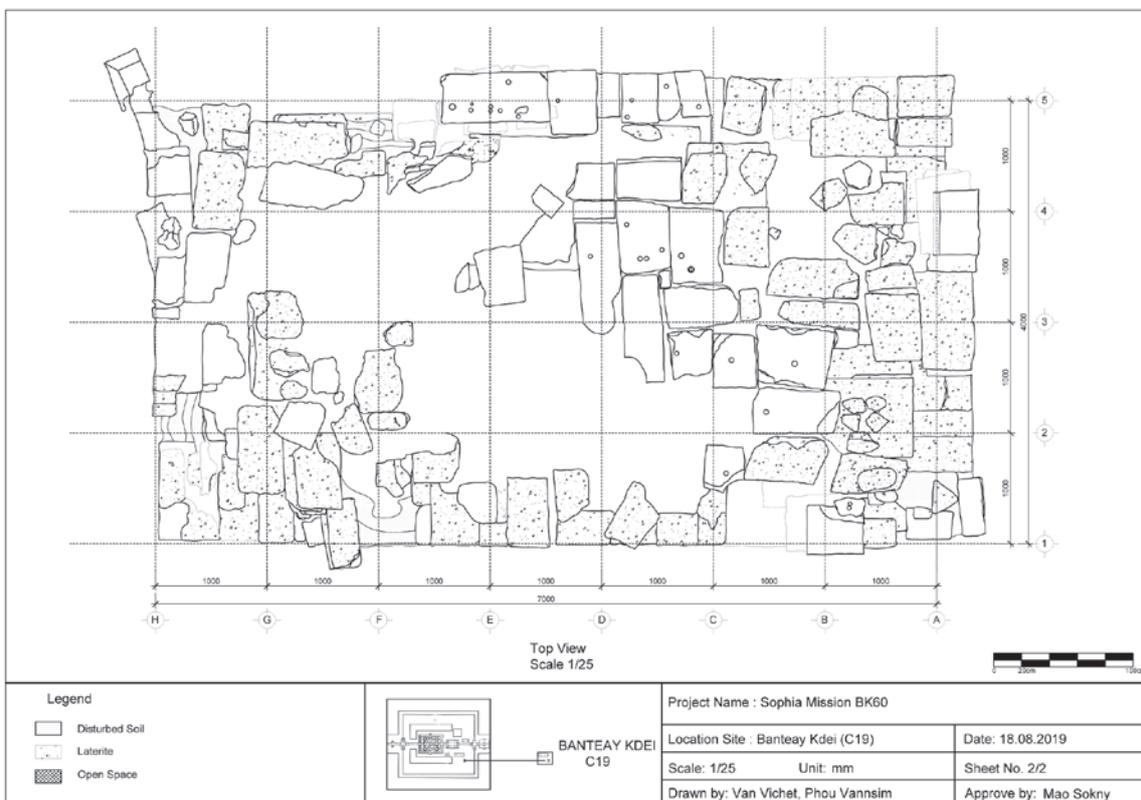
[蔵骨器群埋納坑]

現代の蔵骨器群である。過去の調査においても、C10周囲で蔵骨器が確認されている。1992年、C10東側で 1 メートル四方の試掘を実施したところ現代のものと思われる蔵骨器やガラス瓶の一部が出土し、直ぐに調査を中止し埋め戻した (上野1992)。第19次、21次調査では、C10西側から C10構築後の堆積土中から蔵骨器が複数出土し、その中の一部に16世紀末から17世紀初頭にかけての景德鎮産青花小壺が使用されていた。今回出土した蔵骨器群が現代のものであると断定する理由は、村の人からの話しと出土容器に基づく。近代以降の C10周囲の様相に関する建築および考古学分野の先行研究 (荒樋2001; 宮本2003, 2010) と、村の人への聞き取り調査に基づく現代の C10あたりの様子については、次項で詳しくまとめたい。

今回の調査で確認した蔵骨器群出土遺構の概要は次のとおりである。トレンチ北東隅に近いところで、蔵骨器等が納められた落ち込みが見つかった。土坑として明確な輪郭は確認できなかったが、トレンチ内でのその落ち込みの上端は南北1.10m で、緩やかに掘り下げられ、底部分の下端は南北0.60m、下端幅 (東西) は約0.20-0.40m を数える。底は多少の凹凸はあるがほぼ平らに均されている。その中に、ほとんどが正置状態で、蓋付鉢 2 点、磁器製の鉢 2 点、金属製の蓋付容器 1 点、ガラス瓶 5 点、等を確認した。蓋付鉢 2 点にはいずれも中に火葬骨が納められていた。磁器製鉢 2 点にも火葬骨が盛られた状態で出土した。金属製蓋付容器は、現代でもよく見る蔵骨器である。出土状況や落ち込み造作から判断すると、これらはほぼ同時にまとめてここに埋めら



8-1 小塔 C19立面図（北面）（王立芸術大学建築学部学生による実測）



8-2 小塔19平面図（現状の最上段）（王立芸術大学建築学部学生による実測）

図 8

れた可能性が高い。トレンチ東壁内には他にも同様の容器類やガラス瓶が観察され、落ち込みの規模はさらに東に伸びると推測される（写真11）。

蔵骨器群のうち3点（鉢2点、ガラス瓶1点）を取り上げ、観察、実測、写真撮影等記録化作業をおこなった。これについては、本号掲載の別稿にて詳しく報告する（宮本2020）。なお、記録化作業終了後はこれら3点を再び元の位置に戻し、発掘調査終了後は村の長老の助言により蔵骨器群出土場所で儀礼をおこない、埋め戻しが開始された（写真12）。

[まとめ：各遺構の構築順序とC19周辺の様相]

今回のトレンチで検出された遺構を、あらためて下層から確認したい。まずラテライトが辺り一帯に敷かれる。これはC10南東下層で確認されているラテライト遺構 CU04の東側部分の可能性も残している。その後、C19の構築作業が始まり、やや後れてラテライト列が据え置かれた。現代のある時、村の人たちがこのC10東側に穴を掘り火葬骨を入れた容器を次々を納めて土を被せて供養した。なお、トレンチからはC10とC19の構築順序を直接検証することができなかった。今後の調査の課題としたい。



写真9 C10（仏教テラス）を囲むように配置されたラテライト列



写真10 小塔C19基壇部分（北東角）



写真11 蔵骨器群出土状況



写真12 蔵骨器群埋戻し前の儀礼

(4) 遺物

蔵骨器群については、先述したとおり本号掲載の宮本報告に詳しい。それ以外の出土遺物として、瓦片が指摘できる。瓦片は小片が大半で、とくに C19そばの第5層、6層に多く含まれていた。瓦類のほか、土器、陶磁器が僅か出土している。出土遺物は破片で約300点である（写真13）。蔵骨器群以外の遺物については、今後整理作業を進めてあらためて報告したい。



写真13 出土遺物（第7層出土）の例

3. C10周辺の近現代史と蔵骨器群

(1) 建築分野と文献資料

建築分野から長きにわたってバンテアイ・クデイの歴史の変遷を研究していた荒樋久雄は、欧文の文献を渉猟した末に19世紀末のバンテアイ・クデイの様子を叙述したラエディリッヒ (Laedrich) とティッサンディエ (Tissandier 1896) に辿り着いた (荒樋2001)。ラエディリッヒは、僧侶の住まいがバンテアイ・クデイ内にあり、その近くの野外で僧侶がブツダ像を礼拝していることに言及し、ティッサンディエも、僧侶の住む粗末な小屋があり、みすぼらしいパゴダで仏陀に祈りを捧げている、と書き残している (荒樋 前掲書: 167)。ティッサンディエはバンテアイ・クデイ平面図を残し、図中には「パゴダ」と「僧侶の住まい」が描かれている (図9)。「パゴダ」がC10であることは間違いないであろう。C10は西側に一段高い基壇が築かれ、そこに仏像が置かれたと考えられる。これら僧房やパゴダは、1920年代にアンコール保存事務所が同遺跡内整備事業を進めた際、最終的にはバンテアイ・クデイから移転させられ、現在に至る (荒樋 前掲書: 168)。

(2) 考古学資料

C10周辺で実施された考古学調査 (第19次、第21次) では、C10を「パゴダ」と断定する資料を得てはいない。C10の構築時期は、バンテアイ・クデイが建造されたバイヨン期以降のある時期と推定されるが、それが13世紀なのか、アンコール期の末期なのか、あるいはポスト・アンコールなのかは未だ確定できない。興味深いのはC10南西地区の調査を通じて出土した蔵骨器群である。周囲に掘り方等は確認できず、どのように蔵骨器が埋められたのか、そこに置かれたのかは不明だが、容器として用いられていた青花小壺は16世紀末から17世紀初頭 (明末～清初) にかけての景德鎮産と考えられる。C10はこのような歴史的展開を経て、19世紀末にティッサンディエが実見した「パゴダ」へと繋がるのである (宮本2003, 2010) (図7)。

(3) ライフヒストリー

バンテアイ・クデイの現代の様相については、アジア人材養成研究センターのチュン・ブティ (Choeun Vuthy) を中心に取り組んでいる近隣の村における聞き取り調査や村人との対話の会を

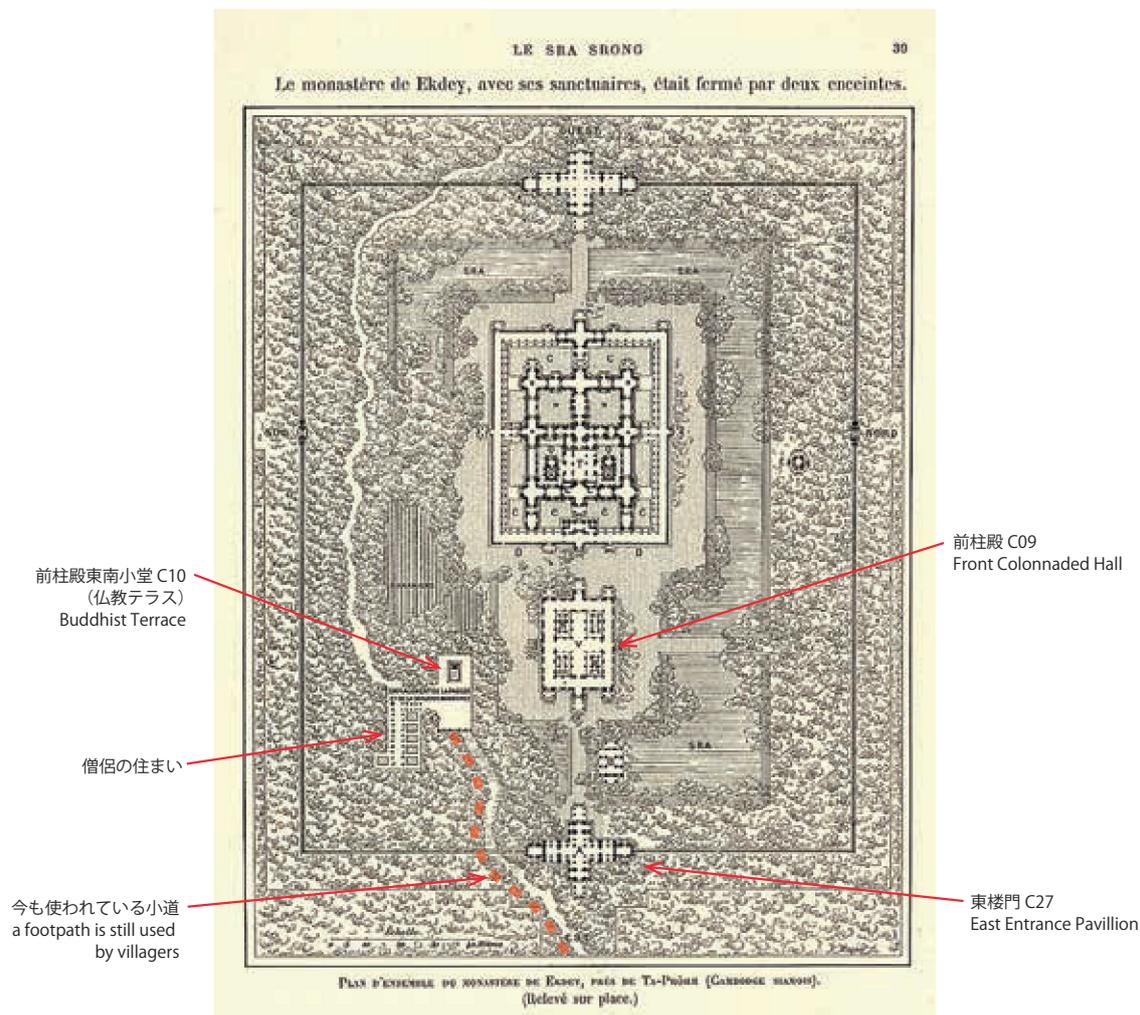


図9 ティッサンディエによるバンテアイ・クデイ平面図 (Tissandier1896)

通じて、メタナラティブではない歴史の叙述が試みられている (Nhim2019; Marui2019; 丸井2020) (写真14)。C10周辺に関して、2019年8月の調査時において次のような体験や記憶を聞くことができた。

「父が、中 (筆者注：バンテアイ・クデイの中、の意) の寺で兄がお坊さんをしていた」、と言っていたのを覚えている。自分が小さい時にはすでに中の寺は無かった。しかし、あのあたり (筆者注：C10周辺) に丸太が転がっていて、寺の柱だった、と大人が話していた。今はその柱も無いね。どこに持って行ったのか。」 (北スラ・スラン村、女性、85歳)

「小さい時、ここ (筆者注：C10周辺) に木の柱が何本か置いてあるのを見たことがある。大人が「昔ここに寺が建っていた」と教えてくれた。」 (ロ・ハール村、男性、75歳)

さらに、カンボジアの盂蘭盆会 (祖先祭祀の儀礼で、カンボジア語でプチュム・バンという。毎年9月あるいは10月がその期間で、日本でいう盆に相当する) 期間に、村人が主催しC10あたりで僧侶を招いて功德を得る儀礼が執り行われていることがわかった。集まる村人は、かつてここに親族を葬った人たちである。2019年は9月21日朝7時過ぎに総勢約40人の村人が集まり、近くの寺から3名の僧侶が招かれ、「経文や儀式を熟知する俗人の祭司 (アチャー)」 (高橋2012)



写真14 村人との対話の会（提供：三輪悟氏）



写真15 孟蘭盆会の様子

に先導されてその儀礼がC10東側の開けた場所でおこなわれた（写真15）。集まった人たちが、この盆の儀礼について説明してくれた。

「ポル・ポト時代（1975-1979年）が終わり、人々が元々住んでいた村に戻ってからも、このあたりの治安は不安定だった。家族が死んだとき、葬る場所が無かった。一番近い寺はアンコール・ワットの中の寺で遠く、寺に埋葬するにはお金もかかった。そこでこの近くの村の人たちの多くは、バンテアイ・クデイのここ（筆者注：C10あたり）に葬った。ある時は、すでに火葬した骨を納めた容器を、ある時は筵に包んだ亡骸をそのまま、このあたりの土を掘って埋めた。自分は実母の遺骨をここに埋めた。なぜそこに埋めるようになったのかはわからないが、もっとずっと前もそのようにしていたのではないか。」（ロ・ハール村、女性、60歳）

「若くして亡くなった息子の遺骨がここに埋まっている。だから毎年、盆の儀礼はここに来る。盆の期間中は、他の寺へも行くよ。」（北スラ・スラン村、女性、82歳）

他の人たちの話も総合すると、ポル・ポト時代が終わってからの様子は次のようにまとめることができる。バンテアイ・クデイ周辺の村人には、身近に寺が無かった。遠くの寺に埋葬しようとしても、墓を作るための費用が高かった。そこで、近くのバンテアイ・クデイ内のかつて寺があったというあたりに埋葬する人が多かった。火葬した骨を、当時よく普及していた蓋つきの納骨容器に入れる家族もいれば、市場で買って来たあるいは自分の家にあった鉢などの食器に入れて皿で蓋をして埋める人もいた。お金がある人は、金属製の蓋付容器に入れる。火葬せずに亡骸をそのまま筵で包んで埋める人もいた。蔵骨器とともに、ガラス瓶に水を入れて一緒に埋める風習があったようだ。こうした行為は、1980年代にずっと続いていたようである。しかし、アンコールが世界遺産登録されることが決まった前後から、埋葬は禁止事項となった。今は、盆の儀礼が、残るのみである。

4. 学生研修

王立芸術大学考古学部学生4名、および卒業生で現文化芸術省無形遺産局専門家1名、そして上智大学国際教養学部学生1名を対象に研修を実施した。午前中はバンテアイ・クデイで発掘調査を、午後は上智大学センターにて文化遺産関連特別講義を受講した。特別講義と遺跡研修、見学は同時期に研修していた王立芸術大学建築学部学生との共同で（写真16、17）、プログラムは次のとおりである。



写真16 王立芸術大学学生研修（発掘調査）



写真17 バンテアイ・チュマール見学

（1）特別講義

8月7日（水）

Dr. Nhim Sotheavin, Sophia University

（上智大学 ニム・ソテイーヴン）

“General History of Angkor”

8月9日（金）

Dr. Kuy Vet, Acting director, Angkor Conservation

（アンコール保存事務所所長代理 クイ・ヴェット）

“Recent Conservation Projects by Angkor Conservation”

8月13日（火）

-1. Prof. Hung Chunteng, Lecturer, Banteay Meanchey University

（バンテアイ・ミエンチェイ大学教員 フン・チュンテン）

“Education and Research on Ancient Khmer Inscriptions”

-2. Mr. Phin Phakdey, Archaeologist, Preah Vihear Authority

（プレア・ヴィヒア機構考古学者 ピン・パクダイ）

“A study on the relationship between ancient archaeological site and ritual tradition in modern community”

8月14日（水）

-1. Dr. Im Sokrithy, Director of Angkor Training Center, APSARA Authority

（アプサラ機構アンコール研修センター長 イム・ソクリティ）

“History of Angkor”

-2. Mr. Un Moninita, Archaeologist, Heritage Education (NGO) and APSARA Authority

（NGO ヘリテイジ・ウォッチ考古学者、アプサラ機構兼務 ウン・モニニタ）

“Heritage Watch and Cambodian Culture”

8月16日（金）

Prof. Heng Sophady, Rector of Royal University of Fine Arts

（王立芸術大学学長 ヘン・ソパディ）

“State of knowledge on Cambodian Prehistory”

(2) 遺跡研修、見学 (抄録)

8月8日 (木)

- 午前 • アンコール・ワット西参道修復現場見学 (アプサラ機構による説明)
 - 引き続きアンコール・ワット内見学 (ニム・ソテイーヴンによる解説)
- 午後 • バンテアイ・クデイ見学 (ニム・ソテイーヴンによる解説)

8月9日 (金)

- 午前 • アンコール・トム内上座仏教の仏教遺構、寺院見学 (ニム・ソテイーヴンによる解説)
 - 西バライ修復現場見学 (アプサラ機構による説明)

8月17日 (土)

- 終日 • バンテアイ・チュマール見学、バンテアイ・ミエンチェイ博物館訪問 (アンコール保存事務所考古学者 Khan Lakhena 氏による案内、アプサラ機構 Chhom Kunthea 氏による碑文説明)

8月19日 (月)

- 午前 • 西トップ修復現場見学 (奈良文化財研究所による説明)

5. 広報活動

アプサラ機構報道局を通じて、8月11日午前、カンボジア国内テレビ局数社による合同取材を受けた。インタビューには、ニム・ソテイーヴンと研修学生たちが答えた (写真18)。収録は約1時間続き、翌日以降テレビニュースやネットニュースで配信された。



写真18 テレビ局の取材を受ける

6. まとめ

第60次調査では、当初目的として掲げていたC10東側も含めた全容解明には至らなかった。設定したトレンチが小規模であったため、C10東端およびその基壇部分を精査することができなかった。一方で、ラテライト列と小塔C19の構築過程には仮説を提示することができた。今後、C10一帯の遺構の特徴と構築過程も含めたあたり一帯の展開を明らかにするため、追加の調査が必要となる。また、今回のように近現代の信仰実践の痕跡を考古学的に観察し記録化できたことは、アンコール遺跡と人々の関わり合いを考察するための重要な方向性を示したとも言えよう。もちろん、とくに時代が下るほど、現代に近づくほど、人々の価値観や考え方に配慮した慎重な調査手法が社会的に求められる。

今回調査したいわゆる仏教テラス周辺を見ると、現代の村の人たちの信仰実践はバンテアイ・クデイ全体ではなく、上座仏教の寺の跡地とされる仏教テラス周辺に限られている。村に暮らす現代の人々の伝統は、少なくともバンテアイ・クデイにおいては前近代からの上座仏教との身体的かつ記憶は確実に継承されている、と言えるかもしれない (MARUI2019)。

[謝辞]

バンテアイ・クデイ第60次発掘調査およびそれに伴う学生研修および文化遺産教育活動は、真如苑からの支援を受け実施したものである。また、バンテアイ・クデイの現代の諸相をめぐる地域の人々へのインタビューを含むライフヒストリー研究に関しては、京都大学東南アジア地域研究研究所共同利用・共同研究拠点「東南アジア研究の国際共同研究拠点」(2019年度)研究課題「世界遺産アンコールをめぐるグローバル規範再考：地域情報学による在来知の発掘」(研究代表者：丸井雅子)の助成を受けたものである。

[参考文献]

- 荒樋 久雄 2001「バンテアイ・クデイ研究(2) —「バンテアイ・クデイ」という呼称の変遷と近代の態様—」『カンボジアの文化復興』18、上智大学アジア文化研究所、164-176.
- 上野 邦一 1992「バンテアイ・クデイにおける発掘調査の略報告」『カンボジアの文化復興』7、上智大学アジア文化研究所、30-35.
- 上野 邦一 1997「バンテアイ・クデイ建物一覧」『カンボジアの文化復興』14、上智大学アジア文化研究所、26.
- 上野 邦一 1998「第22次調査(インベントリー作成のための調査)」『カンボジアの文化復興』15、上智大学アジア文化研究所、124.
- 上野 邦一、古尾谷知浩、宮本 康治、隅田登紀子 1998「第19次発掘調査報告」『カンボジアの文化復興』15、上智大学アジア文化研究所、103-116.
- 河野 靖 1991a「アンコール文化遺産調査計画—総合調査とインベントリー作成計画—」『カンボジアの文化復興』4、上智大学アジア文化研究所、91-108.
- 河野 靖 1991b「建造物インベントリー」『カンボジアの文化復興』5、上智大学アジア文化研究所、145-148.
- 小林 知 2013「カンボジア農村における仏教施設の種類と形成過程」『東南アジア研究』51(1)、34-69.
- 上智大学アンコール遺跡国際調査団 1997「バンテアイ・クデイ建物一覧(案) Banteay Kdei Building Inventory (draft)」
- 高橋 美和 2013「第11章復活した信仰」『カンボジアを知るための62章 [第2版]』明石書店、82-86.
- 中尾 芳治編 2000『アンコール遺跡の考古学』(アンコール・ワットの解明1) 連合出版.
- 中尾 芳治、花谷 浩、宮本 康治 1998「第21次発掘調査概報」『カンボジアの文化復興』15、上智大学アジア文化研究所、119-123.
- 中尾 芳治、花谷 浩、宮本 康治 1999「第21次発掘調査報告」『カンボジアの文化復興』16、上智大学アジア文化研究所、93-106.
- 藤木 良明 1991「建造物インベントリーについて」『カンボジアの文化復興』5、上智大学アジア文化研究所、149-159.
- 丸井 雅子 2020「アンコールにおける祈りの空間—“遺跡”の昔・今—」『アジアの祈り』(第13回アジア考古学四学会合同講演会、2020年1月11日開催、予稿集)、16-20.
- 宮本 康治 2003「アンコール期以降のバンテアイ・クデイ」『アンコール遺跡を科学する』上智大学アジア人材養成研究センター、37-51.
- 宮本 康治 2010「アンコールは何を継承してきたのか：バンテアイ・クデイ遺跡を出発点に」『グローバル／ローカル：文化遺産』上智大学出版、135-160.
- 宮本 康治 2021「バンテアイ・クデイ前柱殿東南小堂(C10)東部における出土蔵骨器について(第60次調査出土資料)」『カンボジアの文化復興』31、上智大学アジア人材養成研究センター、167-170.
- MARCHAL, Henri 1918 Monuments secondaires et terrasses bouddhiques d'Angkor Thom, *BEFEO* 18, 1-40.
- MARUI, Masako 2019 Historical Dialogues between Archaeology and a Local Community in Angkor, *Sophia*

- Journal of Asian, African, and Middle Eastern Studies* 37, 91-112.
- NAKAO, Yosiharu, HANATANI, Hiroshi, and MIYAMOTO, Yasuharu 1998 21st Excavation and Investigation Summary Report, *Renaissance Culturelle du Cambodge* 15, Institute of Asian Culture Sophia University, 253-256.
- Nhim Sotheavin 2019 Cultural Heritage Education in Angkor: From Academics in Archaeology to the Local Community, *Sophia Journal of Asian, African, and Middle Eastern Studies* 37, 32-47.
- Sophia University Angkor International Mission 2001 Archaeological Research at Banteay Kdei Temple: Overview of Investigations over the Past Ten Years, *UDAYA* 2, Friends of Khmer Culture, 153-156.
- TISSANDIER, M. Albert 1896 *Cambodge et java, Ruines Khmère et Javanaises 1893-1894*, Paris : G.Masson.